

第 15 回野菜需給協議会の概要

独立行政法人農畜産業振興機構

本日、生産者、流通業者、消費者等野菜の関係者が一堂に会する第 15 回野菜需給協議会が開催され、「24 年産春野菜の需給・価格の見通し」を確認するとともに、「消費拡大に向けた野菜シンポジウムの開催」を決定しました。その概要は下記のとおりです。

記

1 23 年産秋冬野菜の需給・価格の状況について

- ・「23 年産秋冬野菜の需給・価格の実績とその要因」について確認した。
- ・「価格高騰の原因のひとつとして原油価格の上昇を指摘する報道があるが、今回は専ら低温・日照不足といった天候要因によるものである。」との発言があった。

2 24 年産春野菜の需給・価格の見通しについて

- ・野菜需給・価格情報委員会（平成 24 年 3 月 12 日開催）においてとりまとめられた「24 年産春野菜の需給・価格の見通し」について確認した（具体的には別紙参照）。

【ポイント】

- ・**春キャベツの価格**は、4 月は震災等の影響で安値であった前年を上回ると見込まれるが、5 月以降は前年及び平年を下回る見込み。
- ・**春だいこんの価格**は、4 月以降平年並みと見込まれるが、6 月は青森産への切替りの状況次第で前年を上回る可能性。
- ・**たまねぎの価格**は、5 月上旬頃に出荷が重なる可能性があり、前年を下回る可能性があるが、全体としては前年並みの見込み。
- ・**春夏にんじんの価格**は、順調な出荷が見込まれることから、平年並みと見込まれるが、5 月下旬には平年を下回る可能性。
- ・**春はくさいの価格**は、漬物用への手当のため、4 月上旬に市場への出荷が減少し、平年を上回る可能性があるが、4 月下旬以降は入荷量が増加し、平年を下回る見込み。
- ・**春レタスの価格**は、生育が遅れていた分の出荷が4 月中・下旬以降に集中し、前年を下回る見込み。

・「春レタスについて「生育が遅れていた分の出荷が4 月中・下旬以降に集中」との見通し
がなされているが、他の品目はどうか。」との質問があり、「葉茎菜類には同様のことが
言える。」との答えがあった。

・「4 月からの放射性物質の規制値の引き下げに対応して検査を行う必要があるが、流通の
どの段階の負担が重くなるのか。」との質問に対して「水際のチェックが重要。県の衛生部
局等でまず行う。農林水産省等で県の機器整備への支援を行っている。」との答えがあった。

また、「子供への影響が心配なので、しっかりやってほしい。」・「加工原料としてちゃんと使えるよう、安全な野菜だけ流通するようにしてほしい。」との要望があった。

3 野菜の消費拡大に向けた取組みについて

- ・協議会会員の「野菜の消費拡大に向けた平成 24 年度の取組計画」について確認した。
- ・協議会の新たな取組みとして、

① 野菜シンポジウムの開催（8 月 31 日の「野菜の日」を予定）

② 消費拡大リーフレットの作成・配布

を決定した。

・野菜シンポジウムの開催に関し、「野菜の摂取量が少ない若年層を対象とするのであれば、野菜を経済的に食べる工夫を盛り込んで欲しい。」との要望があった。また、「若い母親に集まってもらうつもりなら、保育室を用意するなどの工夫が必要。」との発言があった。

- ・「高齢者を対象としたセミナーも行う必要がある。」との発言があった。

4 野菜の用途別需要の動向について

- ・農林水産省農林水産政策研究所小林茂典総括上席研究官より、5 年ぶりに改正された野菜の用途別需要動向（3 月 6 日公表）に関して、加工・業務用需要の比率が前回の 55% から 56% に上昇したこと等について説明があった。

5 野菜の機能性や食べ方等に関する新たな知見について

- ・デザイナーフーズ(株)市野真理子取締役より、健康を維持するための野菜の食べ方等について説明があった。

・「必要な成分をサプリで補うのと野菜で補うのと違いがあるか。」との質問があり、「サプリでは過剰になることがある。食品で摂ることを薦めている。」との回答があった。

- ・「あるセミナーで妊婦には葉酸が大切との説明があったがどうか。」との質問があり、「若い女性を対象とする際には、葉酸の大切さをお話している。」との回答があった。

（なお、同内容の講演が 5 月 15 日開催予定の alic セミナーにおいて行われる予定）

（参考）配布資料等については、ホームページで公表いたします。

（問い合わせ先）

（独）農畜産業振興機構

野菜需給部需給推進課

庄司、桃野、吉田

電話番号：03-3583-9478

(別紙)

平成24年産春野菜の需給・価格の見通し

	供給見通し	需要・価格見通し
春キャベツ	<ul style="list-style-type: none"> ・作付面積は、千葉は前年並みと見込まれるが、神奈川及び愛知は前年を下回り、全体としては前年をやや下回る見込み。 ・生育状況は、多雨、降雪及び日照不足による定植作業の遅れと低温及び干ばつによる生育遅れが見られ、小玉傾向。 ・出荷量は、4月は前年並みで、5月は前年を上回るが、6月以降は前年をやや下回り、全体としては前年並みで、平年を上回る見込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4月は前年並みの出荷が見込まれるものの、価格は震災等の影響で安値であった前年を上回ると見込まれるが、5月以降、価格は前年及び平年を下回る見込み。 ・加工・業務用では、寒玉系の出荷が早めに終了すれば、中国産、韓国産の使用にシフトする可能性。
春だいこん	<ul style="list-style-type: none"> ・作付面積は、千葉、長崎ともに前年並みの見込み。 ・生育状況は、低温、干ばつ等の影響により若干の遅れが見られる。 ・出荷量は、4月から5月にかけては多かった前年をやや下回るものの、平年を上回り、6月は前年を上回るが平年を下回る見込み。全体としては多かった前年を下回るものの、平年をやや上回る見込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・価格は、4月以降平年並みと見込まれるが、6月は青森産への切替りの状況次第で価格が前年を上回る可能性もある。 ・外食用では、価格が高いことから、切りだいこんを使用するケースも見られる。一方、加工・業務用では、中国産のだいこんを使用したところ、使えるとの評価がなされている。
たまねぎ	<ul style="list-style-type: none"> ・作付面積は、北海道及び兵庫は前年を上回るが、佐賀が前年を下回り、全体として前年並みとなる見込み。 ・生育状況は、年末から年明けにかけて低温及び乾燥により、佐賀の中晩生に影響が若干出ている。 ・出荷量は、5月に前年をやや下回るものの、全体としては前年、平年ともに上回る見込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・5月上旬頃に出荷が重なる可能性があり、価格は前年を下回る可能性があるが、全体としては前年並みの見込み。 ・国内産の加工・業務用への対応次第では、中国産の輸入が増加する可能性がある。
春夏にんじん	<ul style="list-style-type: none"> ・作付面積は、千葉ですいかからの品目転換が進んでいるものの、全体としては前年並みの見込み。 ・生育状況は、低温、干ばつ及び降雪により、は種作業が遅れているうえに、寒波により生育も遅れ気味。 ・出荷量は、多かった前年並みで、平年をやや上回る見込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・順調な出荷が見込まれることから、価格は平年並みと見込まれるが、5月下旬には平年を下回る可能性。 ・主産地との価格差から、九州産への手当てが増える傾向にある。 ・加工・業務用は、国産への回帰の動きもあるが、一方で価格面の有利性から、中国産等の輸入ものへの移行も見られる。
春はくさい	<ul style="list-style-type: none"> ・作付面積は、茨城は前年並み、長野は前年をやや上回り、全体としては前年をやや上回る見込み。 ・生育状況は、茨城で低温及び干ばつにより遅れが生じている。 ・出荷量は、気温がおおむね前年並みと予想されることから、前年を上回る見込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漬物用への手当のため、4月上旬に市場への出荷が減少し、価格が平年を上回る可能性があるが、4月下旬以降は入荷量が増加し、平年を下回る見込み。 ・外食業界では、4月以降使用量がかかり減少する中で、最近ではサラダ需要も出てきているが、小ぶりの品種や1/2カット等の提供にとどまっている。
春レタス	<ul style="list-style-type: none"> ・作付面積は、茨城、長野、兵庫ともにほぼ前年並みの見込み。 ・生育状況は、降雪及び低温により遅れが見られるが、今後の気温次第で回復の可能性あり。 ・出荷量は、4月以降は前年及び平年を上回る見込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生育が遅れていた分の出荷が4月中・下旬以降に集中し、価格は前年を下回る見込み。 ・価格高騰の影響を受け、加工・業務用では、台湾産への需要が高まる傾向にある。

その他、春野菜全体の消費の動向など

【景気、天候などの要因による消費動向】

- ・11月及び12月前半の気温が高かったことによる前進出荷に加えて、その後の寒波等の影響により市場への入荷量が減少し、価格が高値となった。小売においては、単価が上がったため金額ベースでは好調であったが、数量ベースでは減少した。
- ・野菜の高値を背景に、価格が一定で、食べ残し等の無駄の少ないカット野菜が伸びている。

【震災、原発事故の影響による消費動向】

- ・冬場の産地は、関東より西が中心であることから、一般の小売においては影響はほとんどなかった。
- ・加工・業務用では、一部地域を除いてほとんど抵抗がなくなってきたが、学校給食用においては依然として特定地域への抵抗感が存在している。
- ・4月から、放射性物質の規制値が引き下げられることに伴い、検査の費用について、誰が負担するかが課題。

【野菜全体の販売状況】

- ・カット野菜の消費は、簡便性を求める消費者のニーズにも合致し、家計消費においては従来以上に大幅に増加している。今後、価格動向との関係をより注視する必要。
- ・通常1/4カットしているものをさらに1/6、1/8カットにしたり、鍋物用にざく切りにしたりして、商品を小口化している。

【春野菜の消費動向等】

- ・冬場は、西南暖地を中心とした西の産地の野菜が多かったが、春から夏にかけては関東以北の産地が主流となり、原発事故の影響を心配する消費者の反応が心配。消費者ストレスの緩和のため、西の産地との併売を行う動きがある。
- ・昨年は東日本大震災後の自粛ムードから、花見需要やレジャーを見込んだ販売戦略を打つことができなかった。今年は弁当、惣菜等を含めて春の食材を積極的に販売する動きがある。

【その他】

- ・加工・業務用需要が伸びている中で、加工用産地の育成が今後の大きな課題。
- ・野菜の価格が高騰し、小売の段階ではカット野菜の販売量が増えた一方で、外食業界では、コスト削減のためにカット作業を内製化する傾向も見られる。
- ・消費拡大を行うためには「簡便性」と「機能性」がキーワードになる。その場合、野菜の機能性については、一時的な情報に惑わされないように「医食農連携」を確立し、医学的エビデンスをしっかりと構築することが必要。
- ・若年層においては、特に調理をしない傾向があり鍋物用具材がセットになった「野菜キット」が伸びる傾向にある。
- ・今後は60代～70代の「高齢・単身世帯」をターゲットにした販売戦略が必要。コンビニだけでなく、遠方のスーパーにも足を運んでもらうため、小量目化をさらに進めていくことが必要。
- ・食育は子供だけではなく、大学入学時や社会人になる時期等生活スタイルの変化があるタイミングで行うことが効果的ではないか。